

「五百円札などでは物足りない」

増山雄三

幕府が大政奉還をしてから二か月後の、慶
応三年（一八六八年）十二月九日、武力倒幕
派が天皇を擁し、「王復政古」の大号令を発
して新政権の会議を開き、幕府の摂政や閑白
の官職も廃して、天皇親政の新政府が姿を現
したが、その先頭で行動したのが、長い蟄居
生活に耐えた下級公家の、「岩倉具視（一八
二五）一八八三年」だった。
五百円硬貨が流通するようになり、今では
殆ど見る事がなくなったが、それまでは、昭
和四十四年に発行開始され平成六年の支払い
停止まで製造された、岩倉具視の肖像が描か
れた「五百円札（C号券）」紙幣がある。
紙幣の右にある、蝶ネクタイを締め、額が
やや禿げ上がり四角ばった彼の顔は、淡い藍
色の丸い枠の中に浮かび上がっているが、そ

れは、明治維新の立役者だった十傑の一人と言われただけに、堂々とした貫禄がある。岩倉具視は、公家の堀河康親の次男として京都に生まれ、幼い頃から異彩を放ち奔放な所があったが、天保九年（一八三八年）、下級公家の岩倉家の養子となると同時に、「具視」の名を与えられ、元服後に朝廷へ出仕して、百俵の役料を受けた。そのあと時代は進み、井伊直弼が水戸藩や尊攘派に対して「安政の大獄」を発動したため、「桜田門外の変」で横死し、それにより岩倉らの公武合体派が幕府内で勢力を得て、「和宮降嫁に関する上申書」を孝明天皇に上申し、日米修好通商条約破棄と攘夷を条件に天皇がこれを認め、和宮が江戸へ下向するときには、岩倉は勅使として随行した。ところが、幕府は一向に攘夷を決行しない事に業を煮やした天皇は、長州藩に命じて自らの悲願達成を確約させたため、尊王攘夷運動は各地で一挙に盛り上り、佐幕派とみなさ

れた岩倉は糾弾排斥を朝廷に働きかけられ、天皇からも疑はれた結果、蟄居処分さらには辞官と出家を命じられ、朝廷を去った。

文久二年（一八六二年）、法体になり岩倉が身を寄せたのは、御所から約七^キ北にあった洛北「岩倉村」の廃屋で、洛中への帰参が許される慶応三年（一八六七年）までの五年間、ここで蟄居生活を余儀なくされたが、その廃屋が今では、叡山電鉄の岩倉駅から歩いて二十分の所に、国指定史跡「岩倉具視幽棲旧宅」として残されている。

蟄居中の岩倉は、仲間の公家や諸藩士らと気脈を通じ、数多くの国事意見書を書き、政治の求心力作りに腐心していたが、子供の頃この辺りに里子に出されていた事もあって、村人との面識もありまた、後妻の楨子も洛中と頻繁に往復し情報を届けてくれたので、謹慎中とはいえ、決して孤独ではなかった。

また、現状が挙国一致とは逆の方向に進んでいる危機感から、草の陰で虫が鳴いている

という意味の、「叢裡鳴虫」という意見書も書くが、それは、幕府が強行する第二次長州征伐を非難するものであった。

一方、今日の急務は、人心収攬のためには「朝廷改革」が必要で、それが、朝廷を中心とした挙国一致の王政復古を見据えた「天下一新策密奏書」という、国事意見書にも繋がっていき、その間、土佐の坂本龍馬や中岡慎太郎それに薩摩の大久保利通らが彼を訪ねてきた交流を通じて、新しい政体樹立へと考えを転換していったのである。

練り上げたこの構想は、やがて、慶応三年十二月九日に日の目を見る事になるが、その日朝、御所の門を薩摩や土佐などの藩兵が固め、岩倉に同調する公家らが参集するなか、岩倉は御所に参内して、乾坤一擲の「王政復古」のクーデターを実行した。

それは、当時の情勢は薩長側にあると観望したからで、それによって、武家政権も摂関政治もなくなり、総裁などの三職において天皇

中心の新政府を設立するという、未曾有の策が直ちに承認され「王政復古」がなり、それによって、明治政府が誕生したのだ。しかし、夕刻に始まった新政府初の小御所会議は紛糾し、岩倉らは徳川慶喜を完全に排除しようと狙ったが、前土佐藩主の「山内容堂」は、慶喜の新政府への参加を主張。そして容堂は、「ニ、三人の公卿が幼い天皇を擁して、陰険な企てを行なおうとしてい」る」というのを聞いた岩倉は、「幼い天皇を擁してというのは非礼だ」と反論したが、議論は休憩を機に、岩倉の「決死の手段に出る覚悟」、つまり実力行使の雰囲気伝わったため、これでひとまず収束した。それは、岩倉が蟄居中、自宅を博徒に提供し寺銭を稼いでいた話もあるように、斬新さと度胸の良さを持ち合わせていたので、この会議での議論が伯仲し、「勝つか負けるか」となった時、それなりに、彼は客観的な判断ができる人間だったからだと思はれる。

また、作家の大仏次郎は「天皇の世紀」の中で「長い年月を日陰で暮らした岩倉具視にそれだけの覚悟が無かった筈はない」と記すが、蟄居する彼が龍馬たちと会談した場は、六畳の座敷という小さな空間に、時代転換の萌芽があったに違いない。

その後、版籍奉還と廃藩置県が行われ、岩倉は中央集権国家を確立するため、十項目にわたる近代国家の原則を述べた意見書「建國策」を著し、民政・財源・兵制・教育の全国統一化を主張し、日本は一つの元首の下で、統一国家としてスタートを切ったのである。

岩倉は同時に外務卿に就任し、欧米への使節団を結成し、木戸孝允や大久保利通それに伊藤博文を副使として、自らは特命全権大使となり、明治四年（一八七一年）十一月から一年十か月にわたり欧米諸国を巡り、それらの国々での近代化の様子を視察した。

この旅の中で、彼は、英国が産業革命で工業技術が進歩し、米国が大規模の鉄道網が想

像を超えるものを見て、激しいカルチャーシ
ヨックを受けて、帰国後に明治天皇が出した
「立憲政体の詔書」への対応について、大隈
や伊藤と相談して決めた。

急進派の大隈は、英国の議員内閣制憲法を
主張したが、片や斬新派の伊藤は独逸式君主
大権による憲法を主張し、最終的に岩倉が任
せたのは伊藤で、のち伊藤は憲法調査のため
独逸へ派遣されたものの、岩倉自身は、伊藤
の帰国後に発布された「大日本帝国憲法」の
制定を、その目で見る事はできなかった。

というのは、伊藤が独逸へ出発した後、患
っていた喉頭癌が悪化し、フォン・ベルツが
診断した時には、とき既に遅く、天皇の見舞
いの翌日、享年七十九才で亡くなり、品川の
海晏寺に葬られたが、明治維新の思想的リ
ダーとなり、その礎を築いた彼の行動力を知
れば、「五百円札などでは物足りない」とい
う気がしてならない。

令和二年六月